十和田湖

岩波写真文庫　270

十和田湖
270

岩波写真文庫 270 十和田湖

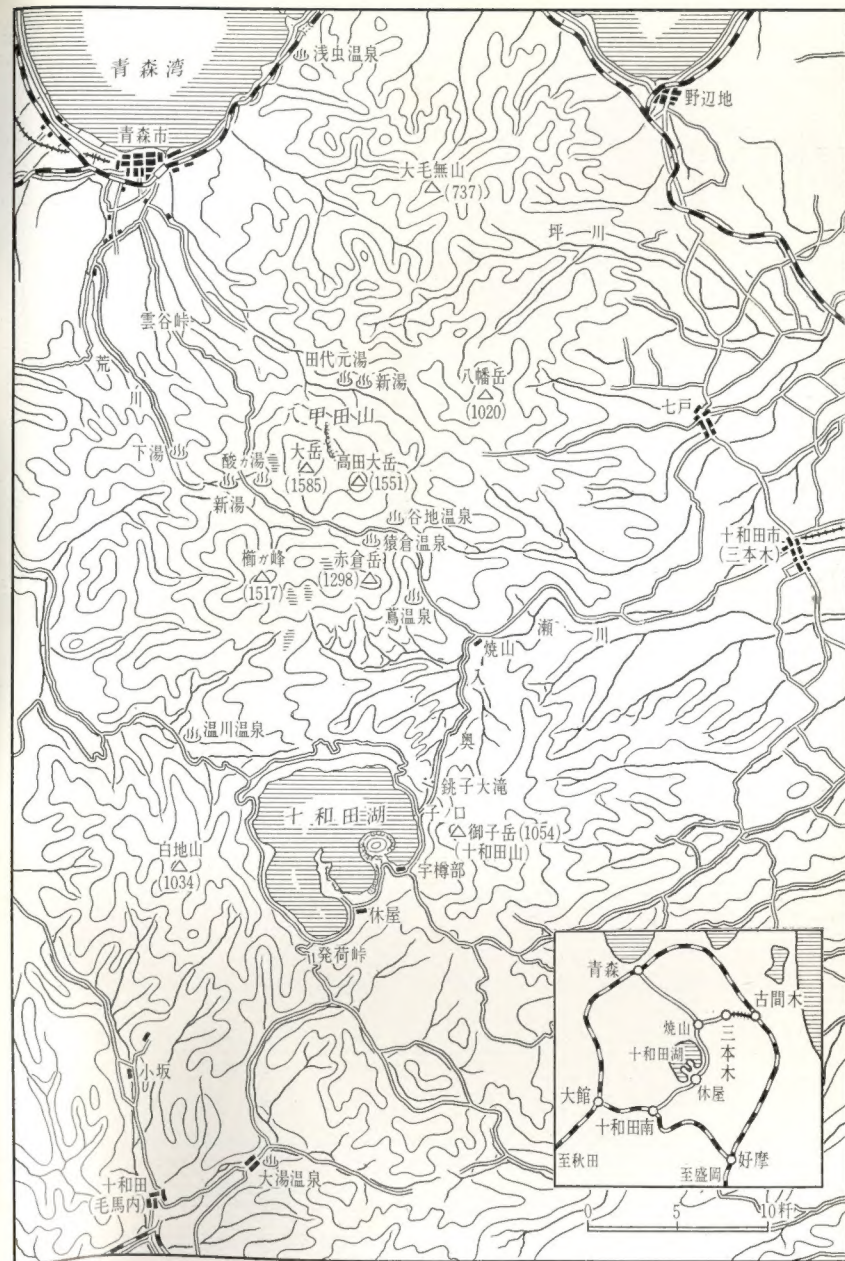
編集 岩波書店編集部
写真 品川弥千江 工藤正市
岩波映画製作所

青森市の南から八甲田連峰を望む

東北本線の終点近く、野内(のない)駅から青森駅あたりまで、ずっと車窓の左側に甲を伏せたような山なみが見えている。これが八甲田連峰である。この山なみを越えて南に、十和田火口湖が大きく口を開き、紺碧の水はその東北岸から流れ出して奥入瀬(おいらせ)の渓流をつくる。凡そ四百三十平方粁に及ぶこの一帯の地域は、特有の山岳美、森林美、湖沼美、渓谷美など変化に富んだ自然景観を以てきこえる本州最北の国立公園。五月中旬には湖辺のサクラ、ツツジ、フジが蕾をひらき、密生するさまざまな樹種の広葉樹が新芽をふき出す。新緑と紅葉の季節には自然美の極致をあらわすが、周辺には俗塵の及ばない温泉が多い。年によっては百万を越える十和田愛好の探勝者が訪れるという。冬の八甲田連峰はその見事な樹氷群を背景に、雄大なスロープをすべるスキーヤーで賑わい、六月も終るころ、まだスキーを楽しんでいる人の姿をみることがある。

目次

定価100円 1958年7月25日発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

青森湾
浅虫温泉
野辺地
青森市
大毛無山 (737)
坪川
雲谷峠
荒川
田代元湯
新湯
八幡岳 (1020)
八甲田山
七戸
下湯
酸ヶ湯
大岳 (1585)
高田大岳 (1551)
新湯
谷地温泉
猿倉温泉
十和田市 (三本木)
櫛ヶ峰 (1517)
赤倉岳 (1298)
蔦温泉
焼山
瀬川
奥入
温川温泉
銚子大滝
十和田湖
子ノ口
御子岳(1054) (十和田山)
白地山 (1034)
宇樽部
休屋
発荷峠
小坂
大湯温泉
十和田 (毛馬内)
青森
古間木
焼山
三本木
十和田湖
休屋
大館
十和田南
至秋田
至盛岡
好摩
0 5 10粁

十和田湖は閑寂な別天地として蔦温泉や酸ヵ湯の名とともに早くから中央の人々に憧憬されていた。大町桂月の名文による十和田紹介が大きな力となったことも事実であろう。紅葉のころここを訪ねる人は年ごとにふえていった。十和田湖まで行く道はそれほど難路ではなく、健脚でない人も容易に探勝できる利点があった。東北本線古間木駅で十和田観光電鉄に乗換え、終点の三本木（十和田市）から三十七粁、または好摩駅で花輪線に乗換え、毛馬内（十和田南）から発荷峠を越えて湖畔に出る二十五粁の道を歩く人が多かった。この他に、青森駅から八甲田山腹を越えて三本木口からの道と合するコース、青森県の黒石から滝ノ沢へ出る山路、秋田県小坂口、東北本線三戸口、奥羽本線大鰐口があった。八甲田は明治三十五年、当時の歩兵第五連隊の将兵が雪中行軍中に全員遭難して以来、魔の山として恐れられていたが、スキー地として秀れていることが次第に知られ、青森口の利用者は年々増加していった。今はこの八甲田越えが十和田観光の本道のようになっている。十和田湖が八甲田と共に国立公園になったのは昭和十一年、その後、岩手県と秋田県の境にある八幡平が加えられて今は「十和田・八幡平国立公園」とよばれている。八甲田連峰の美しい山容、オオシラビソの美林、山麓のブナの純林や高山植物、十和田の奥入瀬渓流や湖辺の自然美が広く伝えられるにつれ十和田へ来る人の層もよほど変ってきた。

十和田湖西岸，銀山から東をみる

岩木山展望所からみた八甲田連峰

八甲田へ――観光バスは青森駅または浅虫温泉から玉川、横内を経て雲谷峠にかかる。ここはもう八甲田の西の裾野である。最高所は標高五百五十三米。広い高原には牛馬が放牧されて、のどかな風景だ。付近に岩木山展望所があってそこからは西に津軽富士(岩木山)の秀麗な姿が望まれ、東南方に八甲田の峰々が仰がれる。横内までしかバスが通じていなかったころは、駄馬の背に乗って、のんびりと峠越えをしたものだ。雲谷峠につづいて萱野高原へ、道は酸ヵ湯までずっとゆるやかな登りである。

雲谷峠から夏泊半島，下北半島をみる

雲谷峠から青森市街，その向うに津軽半島をみる

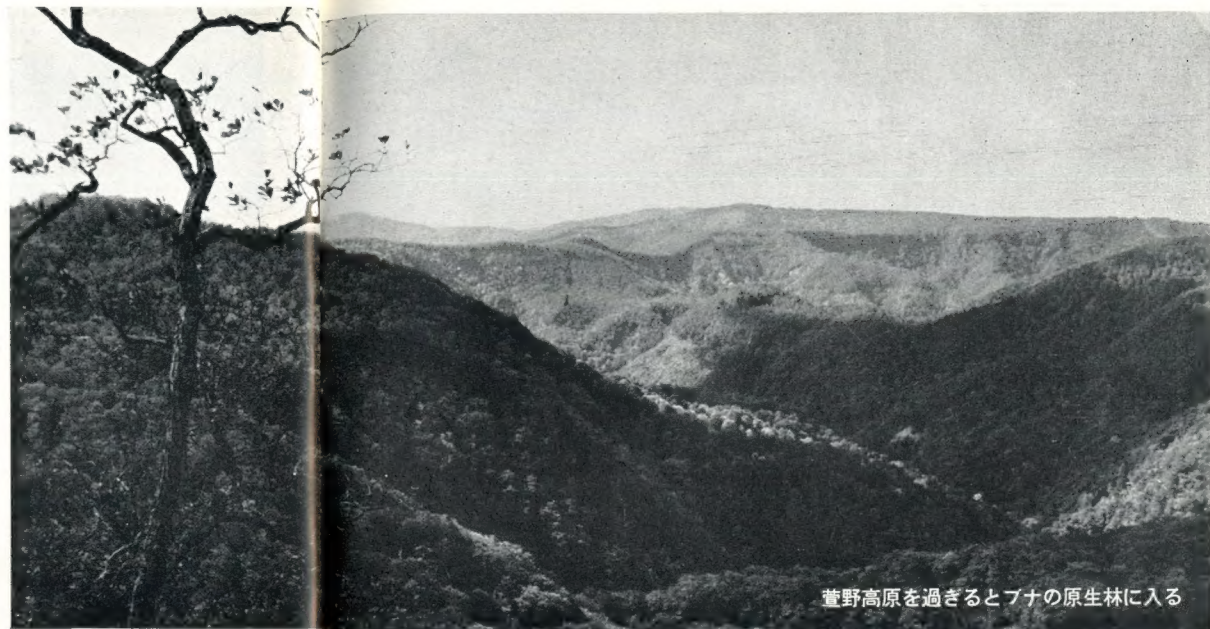
雲谷峠から西に岩木山(津軽富士)をみる

冬，萱野高原を越えて酸ヵ湯温泉に向かう雪上車

萱野高原．この辺りから国立公園地帯に入る

国鉄バス路線の萱野茶屋

萱野茶屋の東方には八甲田カルデラの外輪山である柴森山、七十森山、石倉山などの山々が並び、これらの峰を結ぶ線が国立公園の北限になっている。八甲田連峰との間には標高六百米の田代平高原が広がり、駒込川がそこを西北に横切っている。萱野高原からここの田代温泉や新湯を訪ねる人も多い。萱野茶屋のあるところは鉢森山と鍵掛峠の間で標高は五百米くらい。バスは八甲田連峰の西麓の萱野高原を、次第に標高を高めながら南へと登って行く。

原生林の中に毒水処理の工事が進められている

萱野高原を過ぎるとブナの原生林に入る

八甲田連峰の山麓にはブナの原生林があり、また紅葉の名所だけにトチ、ナラ、カツラ、イタヤカエデなどの広葉樹を交えた混合樹林が密生している。標高九百—千米からは樹相も一変してオオシラビソ(アオモリトドマツ)が豪快な枝振をみせる疎林地帯。山頂近くでは高山植物が繁茂し、岩肌をあらわした無林地帯が見られる。また酸ヵ湯付近では地獄沼や新湯などが火山活動の余勢で盛んに硫気を噴出し、強酸性の毒水を流して樹林や植物を侵すので、その被害を防ぐための工事が行われている。

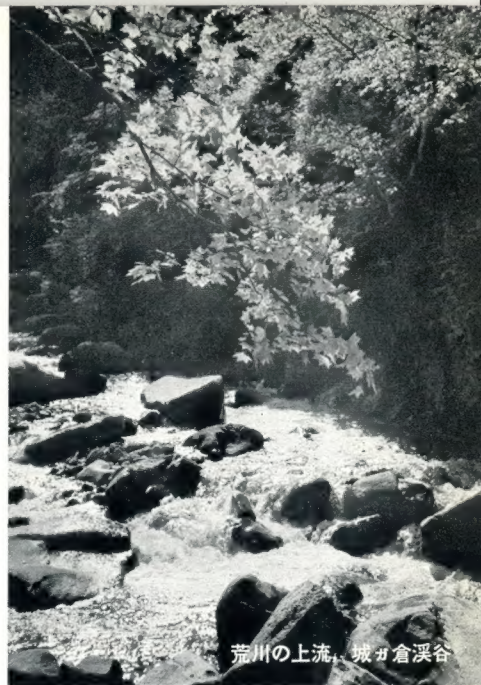
硫気地帯の毒水処理の排水口

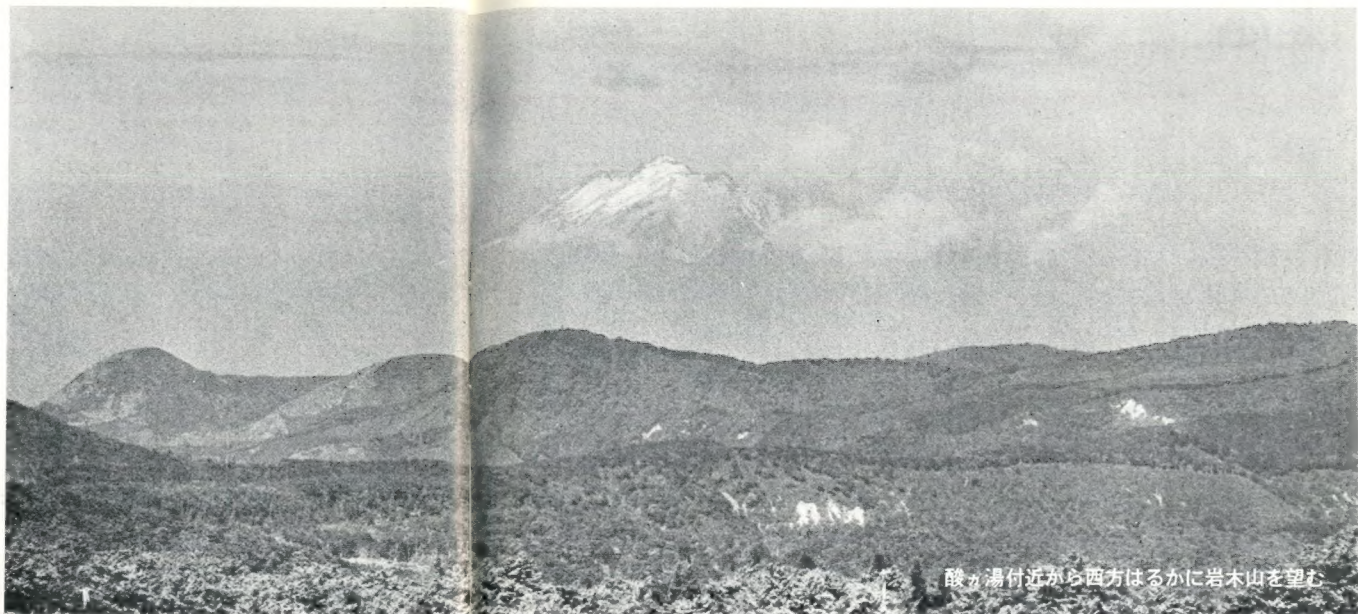
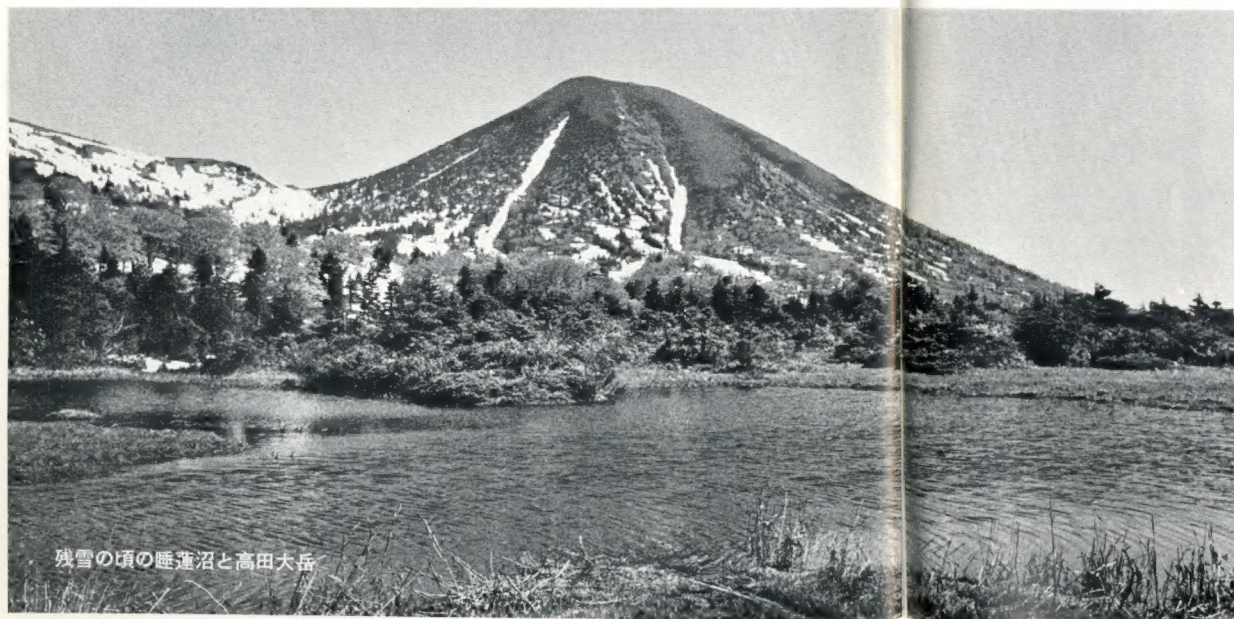
酸ヵ湯付近からはオオシラビソ、シラカバの疎林

荒川の上流、城ヵ倉渓谷

火山屑砕物の岩石が多い

城ヵ倉渓谷にかかる吊橋

渓流岩壁の柱状節理

荒川は八甲田東麓の田代平を横断する駒込川とともに、ちょうど八甲田連峰を東西から抱くようにして北流、下流で合流して堤川となり、青森市内を貫流して陸奥湾に注いでいる。駒込川には雛岳山麓から発する小川や湯ノ川の毒水が注ぎ、荒川には地獄沼や井戸湯、その他の毒水が流れこむので、両河川からの灌漑用水にたよっている下流、青森平野の水田地帯では稲の減収問題が持上ったこともある。両川とも上流の渓谷には安山岩や火山屑砕物の層がみられ、八甲田火山群の活動のさすまじかったことが知られる。駒込川は国立公園地帯を離れてから三階滝や大滝の名勝をつくり、南八甲田の駒ヵ岳に源流を発する荒川は酸ヵ湯、新湯付近を西流して安山岩の見事な節理をあらわす城ヵ倉渓谷をつくっている。城ヵ倉近くの新湯は八甲田山腹の鄙びた温泉だが甚だ原始的で微笑ましい浴槽風景がみられる。

酸ヵ湯の西南方にある新湯温泉

酸ヵ湯付近から西方はるかに岩木山を望む

地獄沼．いつも硫黄と粘土で濁っている

八甲田大岳の西南山腹にある酸ヵ湯は、標高およそ九百米、このあたりからオオシラビソ地帯に入り山気が深くなる。付近は高山植物の自生群落で知られ、東北大学の高山植物研究所がある。山と山との間には「萢（やち）」とよばれる火山性湿原がある。石倉岳山腹の睡蓮沼もその一つ。八甲田越えのバス道をへだてて酸ヵ湯の反対側にある地獄沼は、その東南隅から盛んに硫気を噴出しているが、そのため周囲の岩石は変質し、ところどころ硫黄が付着している。

酸ヵ湯への道．温泉は八甲田大岳の山麓にある

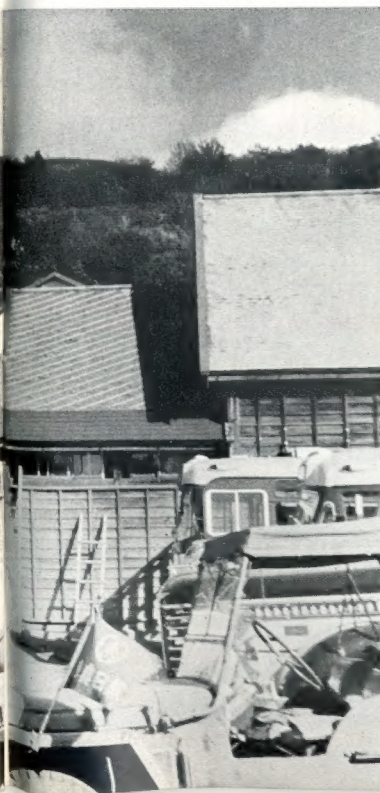
残雪の頃の睡蓮沼と高田大岳

酸ヵ湯は近年まで青森駅から出るバスの終点であった。昭和十五年ころの案内記をみると「省営バス七十四銭、貸切自動車十円」とあるが、八甲田の山麓に集まるスキーヤーの激増した今日では、冬も深い雪道を雪上車が走るようになっている。酸ヵ湯には数棟の建物をもつ旅館が一軒あるだけだが、湯治客を収容する自炊舎の設備もある。硫黄含有量によって四種の浴槽を設けた大浴場が、この温泉の名物だ。

青森駅から酸ヵ湯までは30粁，バスで約2時間

酸ヵ湯は冬もスキー客で賑わう

男女混浴の大浴場

湯治客舎は千人の湯治客を収容できる

国鉄バスの酸ヵ湯温泉停留所

ふかし湯は農村の婦人に人気がある

湯治客の滞在日数は平均10日ほど

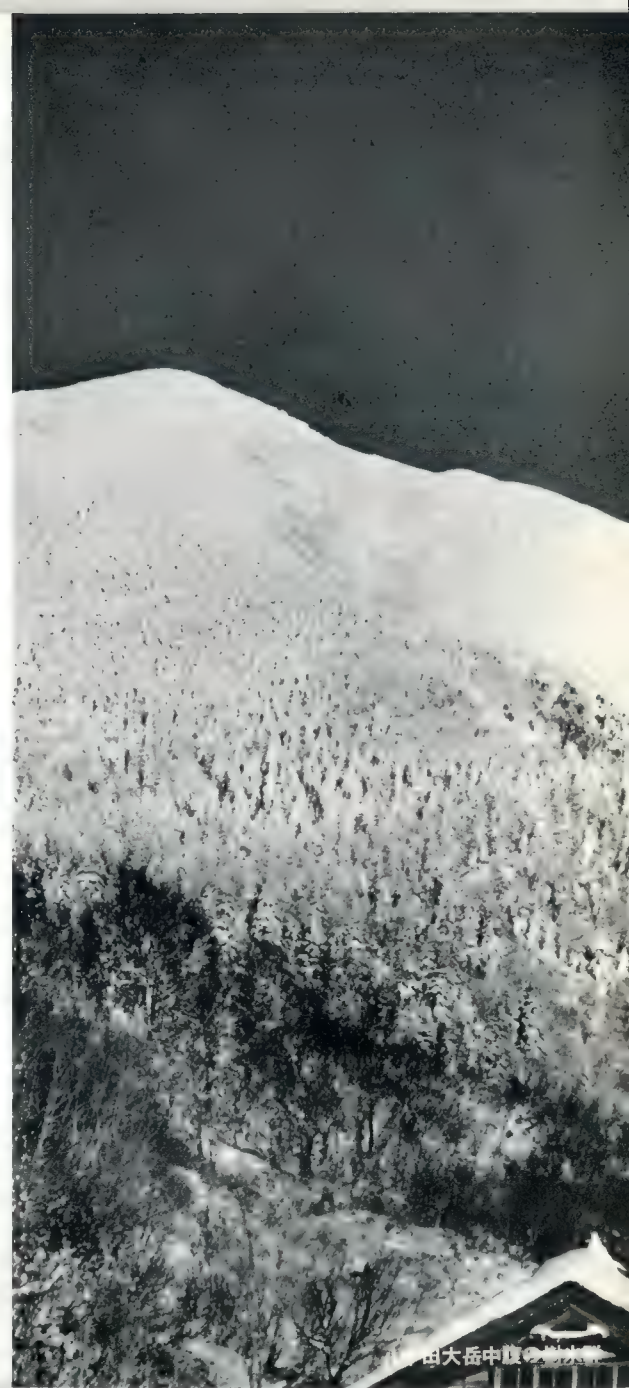
“山の仙人”鹿内老人

国民温泉となった酸ヵ湯は八甲田登山者やスキー客の基地、十和田湖探勝者の疲れを休める好個の温泉として親しまれているが、古くから農閑期の近在人の間で万病にきく名湯として利用されてきた。三百年の歴史を持つといわれ、男女混浴が一つの特徴ともなっていた。泉質は酸性硫黄泉、源泉別に効能がちがっている。

売店には自炊客のための野菜もある

湧口は鹿の湯、冷の湯、熱の湯、四分六の湯の四ヵ所。浴場まで木の樋で引き湯している。泉温は摂氏四十八度―六十度。フカシ湯や滝の湯などの特殊設備もある。この温泉には鹿内辰五郎という老人がいて、八甲田登山者の案内役をしている。笛や尺八を吹きながらの案内が、人々の人気を呼んでいる。

湯治客のための炊事場

大岳の大スロープ，7月までスキーができる

酸ヵ湯から大岳頂上まで約五粁。オオシラビソやダケカンバの林を抜けて辰五郎清水を過ぎ、ハイマツ地帯に入ってから五百米余で頂上に達する。八甲田の斜面は二月中旬から三月中旬ころまで美しく怪異な樹氷の花を咲かせる。雪の消えたあと、オオシラビソの樹幹の中程にスキー指導標のついているのを見かけるが、これによって雪の深さが想像できる。

八甲田大岳中腹の樹氷

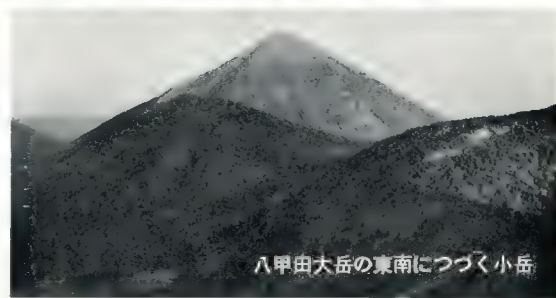
「八甲田」の名にゆかりのある仙人田

千米から千三百米付近の八甲田連峰の山腹に広く点在する湿原の沼は、神の田または甲田とよばれた。これが「八甲田」の名の由来だという。大岳の仙人田もその一つ。頂上の西南側にある小さな湖水は火口湖である。

八甲田連峰の山腹には大小の沼地が多い

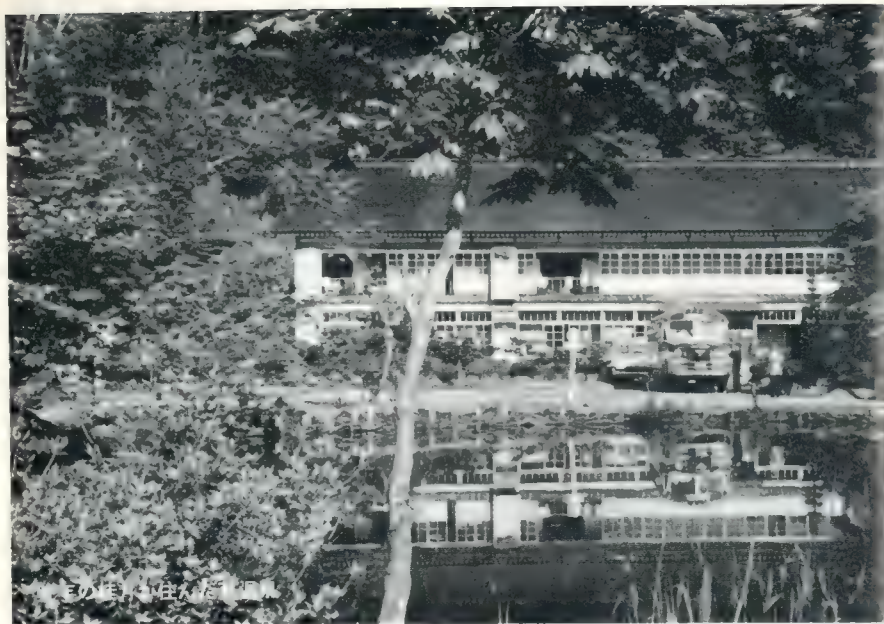
井戸岳から西に岩木山をみる

八甲田大岳の東南につづく小岳

八甲田連峰の山容は何れもよく似ているが、その山頂の様相はかなり違っている。大岳の山頂は丘陵状になっていて集塊岩でおおわれ、東寄りに直径百四十米、深さ五十米の火口がある。北方の赤倉岳は南の火口壁だけを残している。

高峰や火山は古くから山岳信仰の対象であったが、八甲田大岳の頂上にも社祠が建っていて、夏期の登山者の中に信者たちの白衣の姿がみられる。山頂からの眺めは雄大で、遠く太平洋、日本海を一望におさめ、北方には青森市、陸奥湾、西方には下北半島の恐山、岩木山などが展望される。近くは井戸岳、石倉岳、高田大岳などの連山がつらなり、さらに南八甲田の櫛ガ峰、駒ガ峰、乗鞍岳などの山なみが続いている。櫛ガ峰や乗鞍岳の山裾は緩やかにのびて、十和田湖の北岸にまで及んでいる。

大岳頂上の八甲田山神社

地獄沢から[illegible]

赤倉岳の南腹に噴出した寄生火山の井戸岳は、直径二百五十米、深さ八十米の陥没火口を持ち、高田大岳では火口が破壊されて、その口は北方に向かって開いている。前岳には火口がなく、小岳は大岳につづく円錐形の溶岩丘である。

蔦温泉は明治の文人、大町桂月がここに移り住み、健筆を振って十和田の自然を世に紹介したゆかりの湯治場である。単純泉で泉温四十八—五十五度。トチ、ホウ、ナラ、イタヤカエデの繁みに囲まれ、紅葉の名所だ。付近には月沼、蔦沼、長沼など何れも密林に閉ざされた小沼が点在するが、中でも赤沼は四十八米という世界有数の透明度で知られ、深いルリ色の水を湛えている。蔦の西方四粁の赤倉岳山麓まで続いている広葉樹の原生林は見事である。

温泉の湧き出る蔦沼　左に赤倉岳がみえる

谷地温泉の浴場

谷地（やち）温泉は未だにランプをつかっているほどの湯治場だ。炊事場も山家の台所なみである。蔦からは約六粁の登り道。眼前に高田大岳があらわれるところまで登って行くと谷地温泉はもうすぐそこにある。

温泉の炊事場

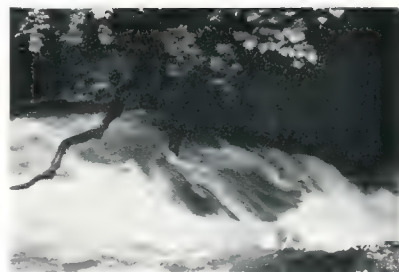
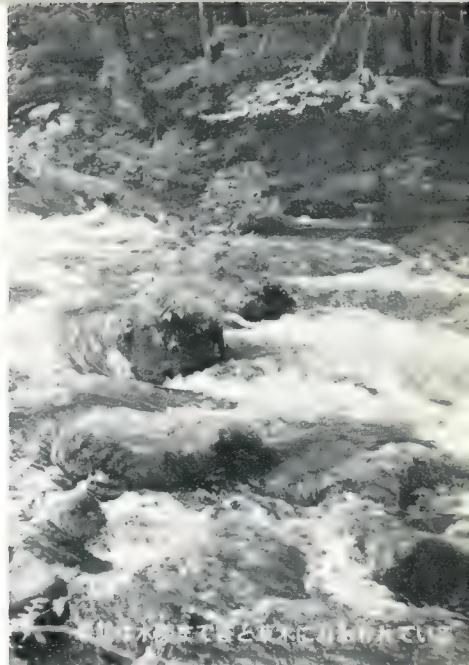
逆に青森駅からの道を酸ヵ湯からたどれば石倉岳山腹の石倉峠（一〇四〇米）で最高所を越え、猿倉温泉の近くでオオシラビソ地帯を離れる。それから三粁ばかりで、標高七百八十米の谷地温泉へ出る。

十和田観光電鉄は三本木まで

十和田市三本木からはバス

十和田湖へ出る青森口からのコースと、十和田市三本木口からのコースの落ち合うところが焼山である。十和田観光電鉄の起点、古間木駅は海岸の三沢に米軍基地があるのでジープや高級車が駐車している。終点の三本木から焼山まで二十四粁。道は焼山橋を渡って奥入瀬渓流沿いに約十四粁で十和田湖畔の子ノ口（ねのくち）に出る。

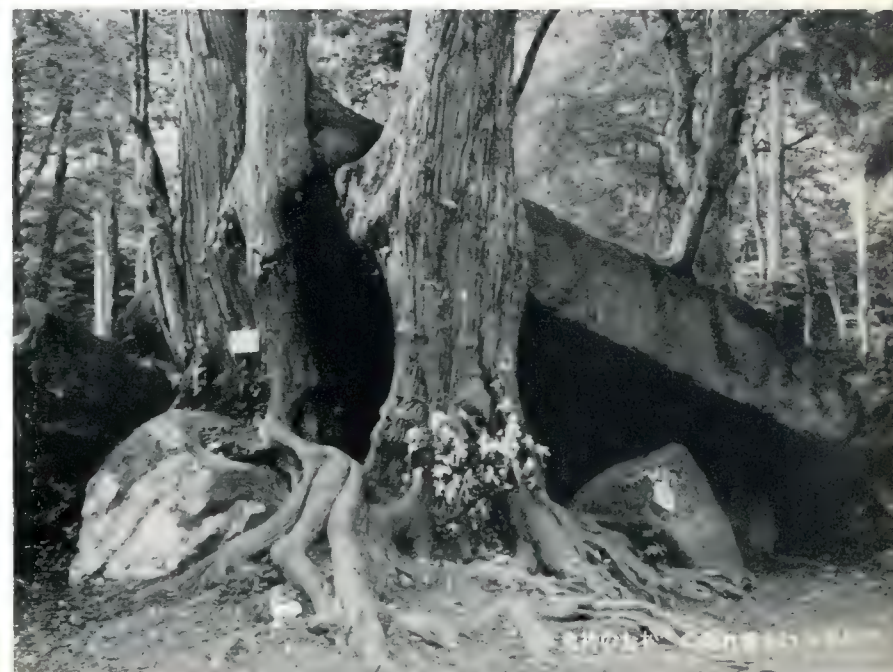
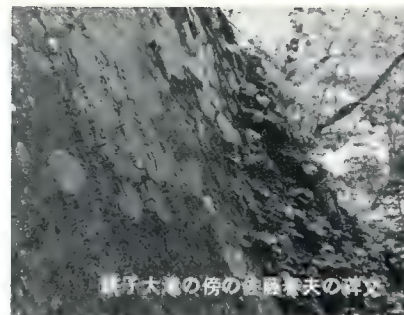
焼山…ここから奥入瀬へ入る

奥入瀬随一の急流 "阿修羅の流れ"

十和田湖の風景美は、奥入瀬の渓流美と表裏一体を成す。その奥入瀬川は十和田湖の東北隅、子ノ口から流れ出し、南八甲田連峰に源を発する蔦川、黄瀬川、大幌内川、小幌内川などの水を集めて、延々七十粁を東流、太平洋に注ぐが、渓流美を現わすのは子ノ口から焼山までの間である。この渓流は多くの山地にみられるようなV字型の幼年谷とは違って、十和田火山噴出のころ流れ出した厚い溶岩台の上に刻まれた広く浅い谷である。両岸は垂直に削られているところが多く。各所に柱状、方状、板状の節理をあらわしている。垂直の岩壁には多くの滝が懸り、激流、瀬、淵をつくる渓流の水は、あくまで清澄である。焼山から道をたどると最初に紫明渓。カエデ、ナラ、ホウ、ブナの樹林をくぐって石ゲ戸の瀬を眺めながら進むと馬門岩や不動岩。阿修羅の流れを過ぎると河中には切り立っている。対岸には屏風岩が特に小島が多く、「九十九島」とよばれる名勝である。十和田湖の水位の平均差は約四十糎で、余り増減がなく、従って奥入瀬川の水位も大体平均しているため、渓流中の岩石は、みな水際まで苔や草におおわれている。岩石は丹精した盆栽のようで、奥入瀬渓流の特色のある景観である。流れはおおむねゆるやかだが、駒止橋を渡って左側にみえる「阿修羅の流れ」は急流である。ミズナラ、ブナ、カツラ、イタヤカエデなどの密林が渓流に映えて渓谷美を一そうひきたたせている。駒止橋から裸渡橋に至る間は特にイタヤカエデが多く、奥入瀬随一の紅葉の名所だ。

九十九島付近の渓流

奥入瀬渓流は新緑、紅葉の季節が特に美しい

新緑の頃の渓流

渓流の両岸にはブナの林が多い

奥入瀬渓谷は落葉樹、広葉樹の代表的な美林地帯。黄瀬川との合流点、「三乱（さみだれ）の流れ」のあたりは水際まで樹々の緑がしたたっている。石ゲ戸付近の密林は特に見事で、渓流は巨樹に蔽われて昼もなお小暗い。道路の林間にある岩窟が女賊の隠れ家だったという伝説も、さてこそとうなずけるような所だ。

裸渡橋を渡るところから滝が多くなる。最初の雲井の滝はバスの中からもよく見える。或は奔流し、或は旋回する渓流の変化にともない白糸、玉簾(たまだれ)、白絹、友白髪、姉妹、九段などの滝が無類の風光美を添えている。周辺の樹種はさまざまで、五月ころは色とりどりの若葉が萌えて花のように見える。「日に青葉」の候はこのあたりでは七月から八月へかかる。すがすがしい新緑の森に、しきりと野鳥が飛び交うのもこのころだ。秋になるとミズナラ、トチ、ヤマウルシ、ハシズミ、カツラなどが一せいに紅葉する。ナナカマドの赤とイタヤカエデの黄が一きわあざやかな色彩を見せる。

銚子大滝の傍の佐藤春夫の碑文

日照りが続いても涸れたことのない千筋の滝

十和田湖の裏玄関、子ノ口

奥入瀬川の水は十和田湖の排水口、子ノ口から約一粁半の下流で銚子大滝となって落ちる。道はここから上流の神明橋を渡って渓流の左岸に出るが、百両橋を過ぎて再び右岸を行くと間もなく子ノ口である。観光客はここから遊覧船に乗って湖上を巡り、休屋に上陸、更に和井内を経て発荷峠越の毛馬内口(十和田南)へ向かうのが普通である。観光シーズンは五月―十一月下旬。

奥入瀬川の取入口から十和田湖を望む

十和田湖は密林に蔽われた八百米前後の山に囲まれ、フォーレル氏の分類した水色第三号にあたる濃藍色の水を湛えている。面積は約六十平方粁。南岸から御倉、中山の両半島が突き出し、湖面を外湖、中湖、内湖に分っている。北半は北湖ともよばれる。湖水の最大水深は中湖の三百七十八米でこれは田沢湖、支笏湖に次ぐ深さ。プランクトンは少なく栄養に乏しい湖水だが、明治三十六年頃からヒメマスが放流されている。中山半島の西岸には南北一・五粁に及ぶ御前浜がひろがり、その沖に蓬萊島、カブト島、ヨロイ島などの美しい岩島がある。休屋は国鉄バスと遊覧船の発着所で、十和田、熊野両神社、十和田科学博物館の所在地。

[illegible]休屋[illegible]ボート

休屋[illegible]口を結ぶ[illegible]遊覧船

[illegible]

ヒメマスをとる漁船．中湖付近

朝霧につつまれた十和田湖

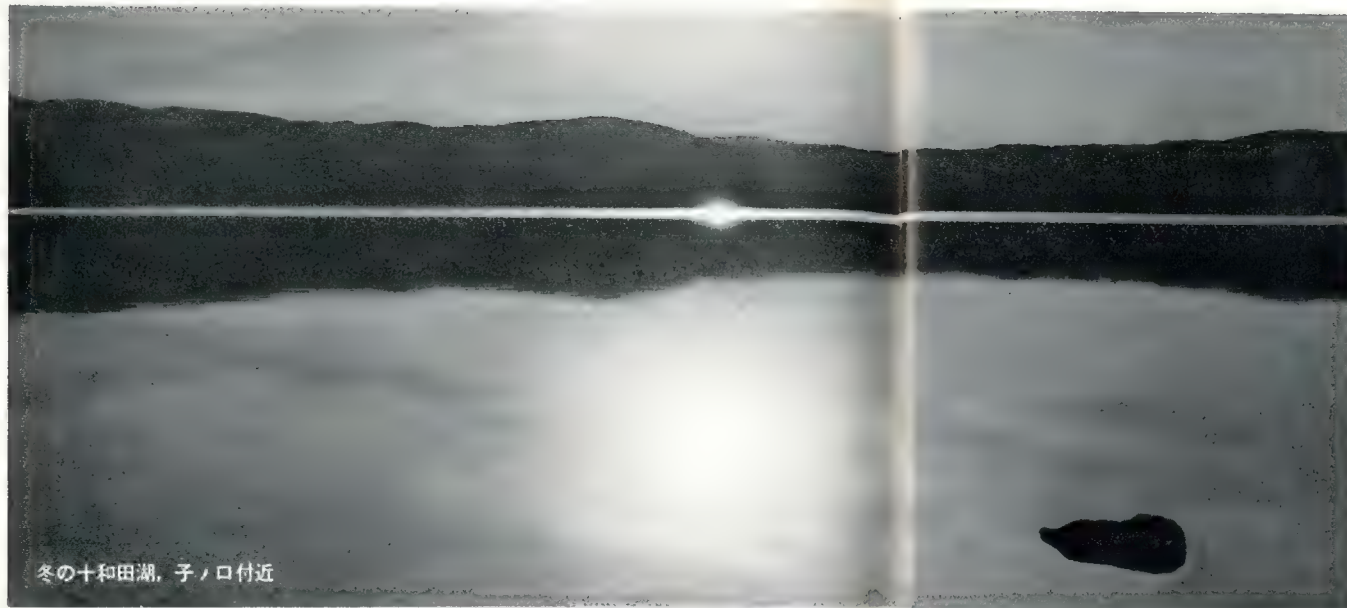
御倉半島はさまざまな色彩をした溶岩の絶壁を以て湖上にのび、最高部の御倉山(六九〇米)もまた垂直に近い岩肌を湖中に没している。この山の西南がわの大溶岩壁は一粁余に及び、千丈幕とよばれる。西北端の八雲崎付近は風の日の波浪が高く、静かな朝には霧が立ちこめる。赤松の繁った日暮崎をまわって中湖に入ると半島の西壁に、酸化鉄を含む赤色の赤根岩、五色の層を重ねる五色岩、安山岩の烏帽子岩、屏風岩、剣岩、千本松の名勝が続いている。中山半島は密林に蔽われた低い丘で、湖岸線の出入りが多い。千本松からまっすぐに西へ、中湖の最深部付近を過ぎて中山半島に突きあたったところが「占い場」。澄みわたった湖面に一文銭を投じ、それが平らに沈めば吉、斜に沈めば凶だという言い伝えがある。中山半島の高所にはヒメコマツの純林があり、船の中からもそれが見える。突端の中山崎を回って内湖に入ると竜ガ崎、錦ガ浦、グミの木の繁るグミ島、続いて安山岩の柱状節理をあらわした六方石がある。この辺りから御前浜、休屋の集落が見えてくる。

貸モーター・ボートの桟橋．休屋

中湖の"君ヶ代岩"

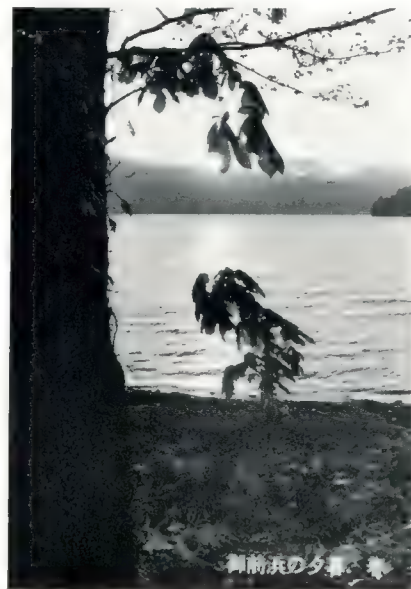
御前浜の高村光太郎作"湖畔の乙女"

御前浜には高村光太郎作の「女の裸像が二人、影と形のように立っている」。十和田観光開発に功労のあった大町桂月ほか二人を記念して建てられたもの。休屋と子ノ口の中間、外湖の奥に宇樽部という部落がある。ここから十和田湖周辺の最高峰、御子岳(一〇五四米)の頂上へ登ると湖の全貌が展望される。休屋と宇樽部の間にも瞰湖台展望所があり、観光バスが停車する。御倉半島と中山半島に抱かれた中湖を眺めるにはここが最もすぐれている。

中湖の静かな入江。向うに十文字峠がみえる

冬の十和田湖，子ノ口付近

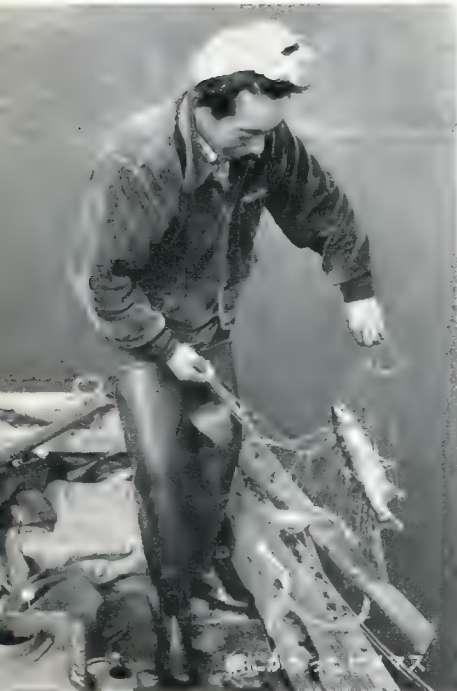
湖上遊覧船の中

子ノ口の遊覧船発着所

客を待つ旅館の番頭たち，休屋桟橋

御前浜の夕暮，秋

子ノ口付近の夕映，夏

休屋の十和田神社

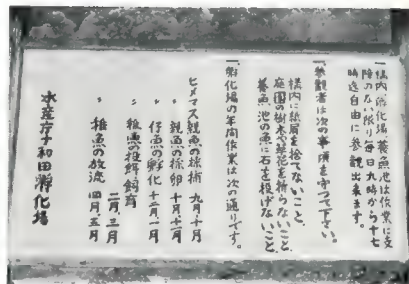
休屋の十和田神社は古くから農民や漁民の尊崇をうけていた。祭神は日本武尊。もとは十和田湖の主と伝えられる南祖坊を祀ってあったという。江戸時代には南部藩の霊場であった。信者たちは神社の裏山にかかる断崖の鉄梯子を伝って「占い場」へ下り、吉凶を占った。

十和田湖にはもとイモリくらいしか住んでいなかった。明治十七年(一八八四)、生出(おいで)の青年、和井内貞行(一八五八―一九二二)が「われまぼろしの魚を見たり」と叫んで養殖事業に生涯を賭け、イワナ、コイ、フナ、マスを放流したことは名高い。幾度かの失敗の後、明治三十六年、北海道の支笏湖からカバチェッポ種のマスの卵をとりよせ、人工孵化して約三万尾を放流、これが成功して十和田湖にマスが繁殖するようになった。

二代目、和井内貞行氏

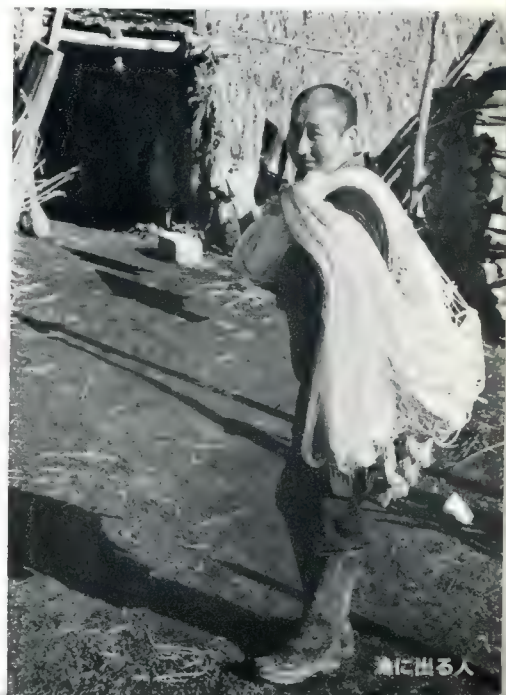
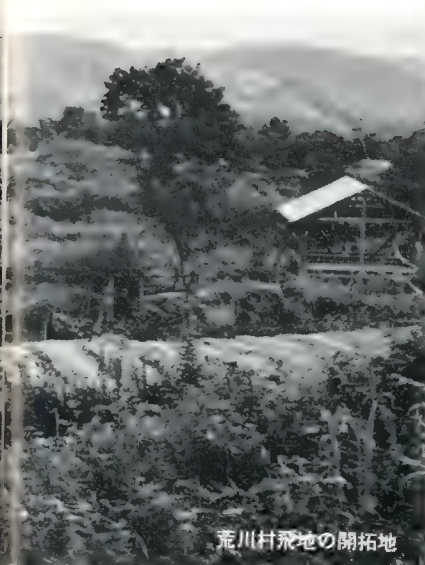
ゴリやエビをとる漁師

国立十和田孵化場での採卵作業

漁に出る人

一、構内孵化場・養魚池は作業に支障のない限り毎日九時から十七時迄自由に参観出来ます。
一、参観者は次の事項を守って下さい。
構内に紙屑を捨てないこと。
庭園の樹木や草花を折らないこと。
養魚池の魚に石を投げないこと。
一、孵化場の年間作業は次の通りです。
ヒメマス親魚の採捕　九月・十月
〃　親魚の採卵　十月・十一月
〃　仔魚の孵化　十二月・一月
〃　稚魚の投餌飼育　二月・三月
〃　稚魚の放流　四月・五月
水産庁十和田孵化場

「浅黄モンパの和井内」、「蒲ハバキの和井内」氏の二十年にわたる苦心によって十和田湖でヒメマスがとれるようになると、それを専業とする漁民が住みつき、集落ができた。生出（おいで）は和井内と改称され、孵化場は国立となった。放流される稚魚は年間数百万尾。このマスは十和田観光客の食膳に供されるばかりでなく、ゴリやエビとともに湖畔の人たちの重要な栄養源でもある。

いけすから水揚げされる[illegible]

ここでもリンゴは子供のお菓子代り

[illegible]所の一つ

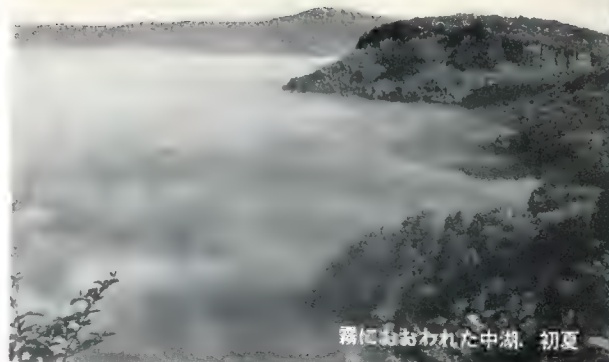
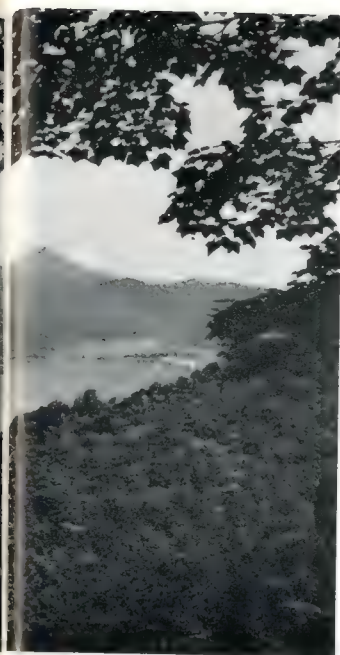
湖水の西岸ではかつて銀や鉛が採掘されていた。銀山、鉛山の地名が残っている。秋田県小坂口からの十和田道は、標高八百八十米の鉛山峠を越えて湖畔の鉛山に出るが、峠からの展望はすばらしい。鉛山採掘場は殆んど掘り尽されて今は稼動していないが、ボーリングの結果、石膏がとれる見込みがあるという。

荒川村飛地の開拓地

鉛山採[illegible]

[illegible]は中国からの引揚者

八甲田山、十和田湖周辺は酸性土壌で地味もやせ、いまも大部分が未開拓である。この一帯の開拓は八甲田山群の東麓、三本木原からはじめられた。茫々たる原野であった三本木原は安政二年（一八五五）、新渡戸稲造の祖父、伝翁によって初めて開拓の鍬が入れられた。さらに高度の高い十和田湖周辺は積雪二米に及ぶ高冷地で、耕地といえば湖畔の宇樽部に僅かにみられるにすぎなかったが、戦後、十和田カルデラの南麓、秋田県側に、中国からの引揚者を中心とする開拓が進められている。

鉛山展望所から東，中山，御倉半島をみる

霧におおわれた中湖．初夏

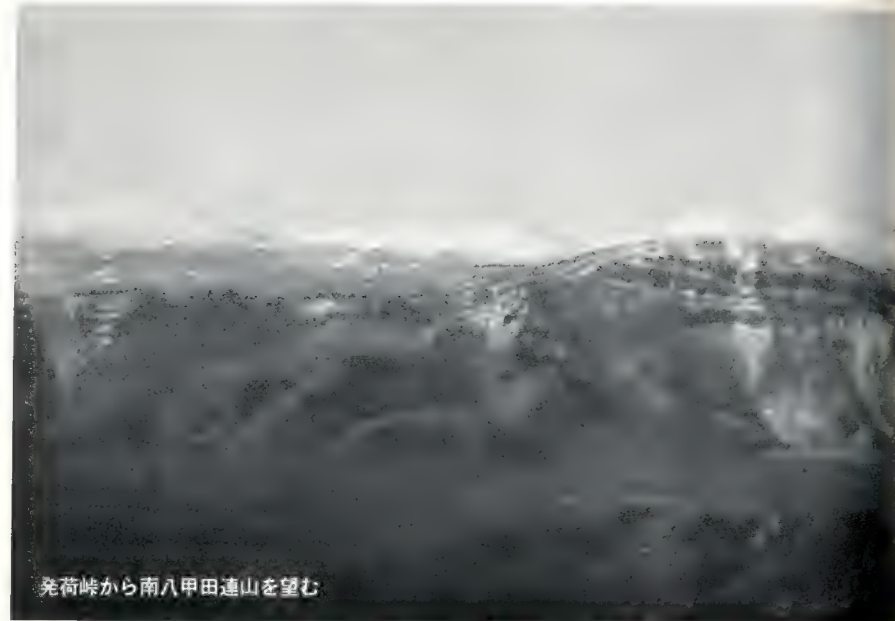
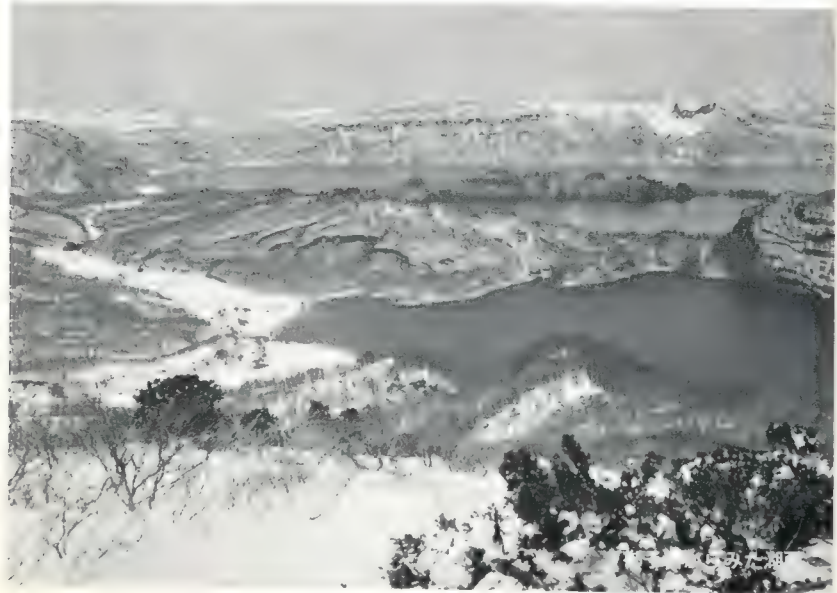
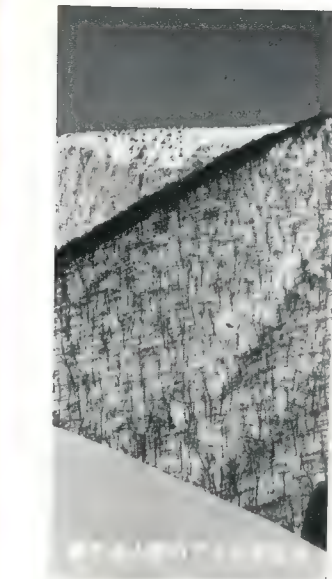
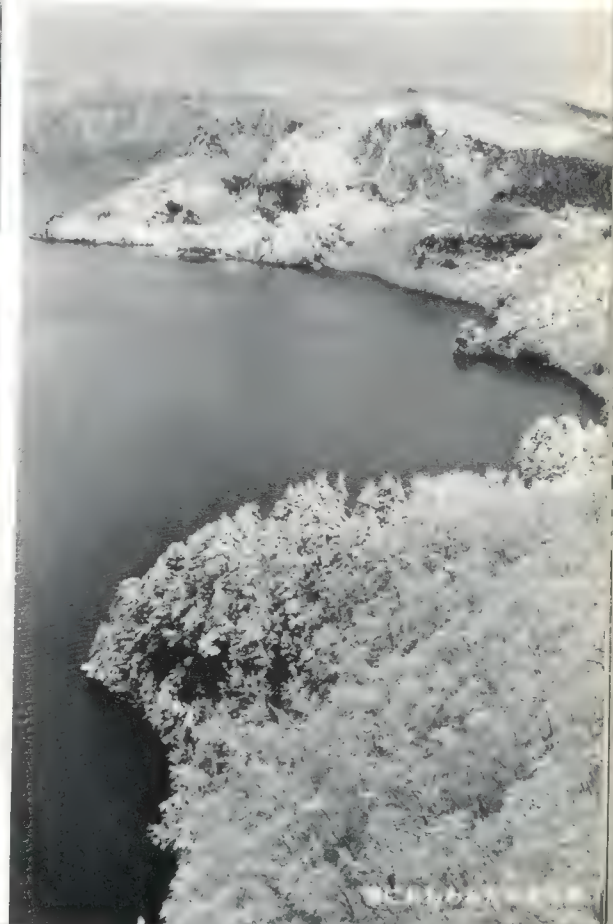
十和田湖の風景美は自然が創ったその巧妙な地形に負うところが大きい。新第三紀から第四紀へかけての那須火山帯の活動によって十和田火山が噴出した。最初は扁平な形をしていた頂部が次の活動で陥没し、現在の湖水の概形ができた。何万年か過ぎて十和田火山は再び活動を開始した。第一の陥没火口の南寄りに新しい火山体が噴出した。やがてその中央が深く落ちこんで今の中湖が出現した。このときに残された火口壁が中山、御倉の両半島である。

和井内の十和田孵化場全景

発荷峠から南八甲田連山を望む

らみた湖

十和田湖をとりまく御子岳、御花部山、青撫山などは十和田火山の陥没によって残された外輪山である。御倉半島の御倉山やその沖の御門石などは第二火山の寄生火山だったともいわれている。中湖が垂直に近い角度で陥没したことは、御倉半島や中山半島の断崖によっても察知される。湖水ができてから奥入瀬川の河床は削られて次第に低くなり、十和田湖の水面も低くなった。湖の火口壁はかなり開析され、宇樽部、休屋、大川岱には小さな湖岸デルタが形成されているが、当初の火山形態は余り崩されていない。殆んど水源らしいものを持たないここの湖水を養っているのは地下水であろうといわれる。

十和田は十一月下旬頃には早くも錦の衣裳を脱いで雪の衣をつける。北西風が吹きつのり樹々の梢が鳴り始めるともはやここを訪れる人もない。三本木口から来る人は焼山を左に見ながら蔦温泉、八甲田への道へそれて行く。青森口からの人々は酸ヵ湯で足をとめてしまう。冬の十和田湖は置き忘れられたように静かだ。白い自然だけが迫るような美しさを以てそこに横わっている。

早春の子ノ口付近. 岩についた氷がとけはじめる

十和田湖の水面の温度は冬でも滅多に零度を下らない。水面下五十―百米は四・五度、百米以下では、いつでも五度を保っている。底の方が却って暖いのは地下から温泉が湧くからだともいわれている。厳冬でも湖面の一部に薄氷をみるだけである。まともに風をうけ、波しぶきを浴びるところでは結氷するが、湖辺では普通、氷をみない。知られているところでは、子ノ口から湖畔の道を北へたどったところに突き出した岩盤上の表面が結氷する。外湖の東の湖岸に垂れた樹枝が結氷して風のたびに枝と枝とをふれあわせ妙音を鳴らすのもこの辺りの風波が強いからである。最大積雪量は休屋の二百七十糎。

ケースにおさまる"湖畔の乙女"

旅館も売店も冬眠に入る、休屋

陸で冬を越す遊覧船

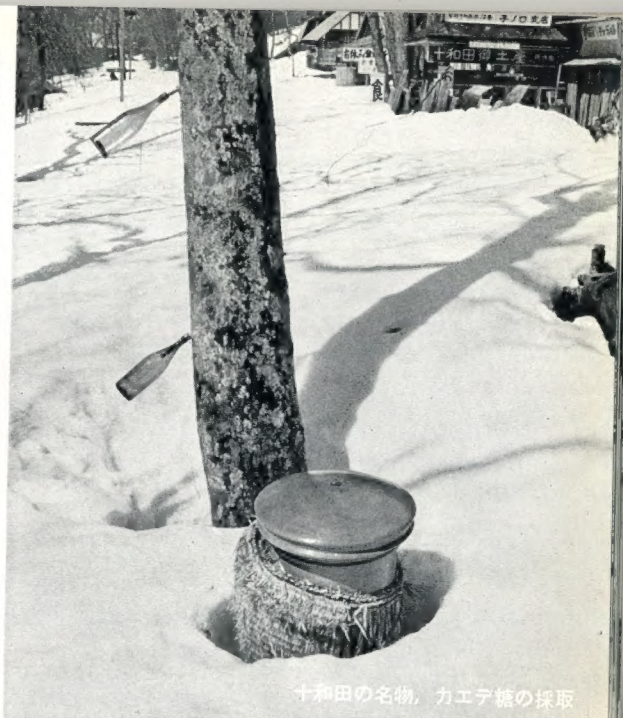
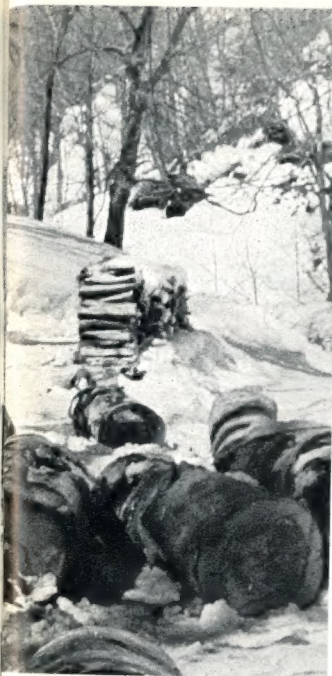
冬の湖畔は子供の遊び場，宇樽部

「―この原始林の圧力にたえて　立つなら何千年でも黙って立っていろ。」湖畔の裸像は、冬の間、立ったままでケースにおさめられる。原始林の圧力がこの乙女をこわしてしまいはせぬかを秘かに怖れるからであろうか。実際、何もかも深い眠りに落ちこんだあとの十和田の風景には、人を怖れさせるような迫力がある。子供だけが嬉々として雪と戯れている。

宇樽部の水車小屋

十和田の名物，カエデ糖の採取

三月下旬にはバス道路の除雪がはじまる

冬の仕事は主に木材搬出

大きな火口に充ちた青く清澄な水が、風を呼び波を起し、周囲の山々を引き込むようにもみえる十和田の「神秘」が素朴な人々の心をうたぬはずはない。十和田湖には次のような神話がある。――山を裂き、岩を切り開き、水をせきとめて十和田湖をつくり、竜神に化身して湖中にすんでいたのは八郎太郎という勇者であった。あるとき熊野神社の神霊をうけてここにやってきた南祖坊が、竜神の八郎太郎と争い、遂にここの美しい湖の主となった。中山半島の赤い岩は、そのときの流血に染められたものである。――湖畔の人々は雪国特有の服装に身を固めて木材を運び、雪を割り、イタヤカエデの樹液を採取し、きびしい労働に追われながら、訪れる人もない自然の中で、ふと、こんな物語に思いを馳せているかも知れない。

80歳の老爺．宇樽部の山奥にて

岩波写真文庫目録

1＊木綿
2 昆虫
3＊南氷洋の捕鯨
4＊魚の市場
5 アメリカ人
6 アメリカ
7 雪の結晶
8 写真
9 レンズ
10＊紙
11 蝶の一生
12 鎌倉
13 心と顔
14 動物園のけもの
15 富士山
16 積雪
17 いかるがの里
18 鉄
19＊川—隅田川—
20 雲
21 汽車
22 動物園の鳥
23 様式の歴史
24 銅山
25 スイス
26 スキー
27 京都—歴史的にみた—
28 力と運動
29 アメリカの農業
30 アルプス
31 山の鳥
32 奈良の大仏
33 尾瀬
34 電話
35 野球の科学
36 星と宇宙
37 蚊の観察
38 長崎
39 高野山
40 正倉院(一)
41 彫刻
42 仏像
43＊化学繊維
44 蛔虫
45 野の花—春—
46 金印の出た土地
47＊東京—大都会の顔—
48＊馬
49 石炭
50 桂離宮と修学院
51 日光
52 醤油
53 文楽
54＊水辺の鳥
55 米
56 正倉院(二)
57＊石油
58 千代田城
59 歌舞伎
60 高山の花
61 波
62 京都御所と二条城
63 赤ちゃん
64 オーストラリア
65＊ソヴェト連邦
66 能
67＊造船
68 東京案内
69 平泉
70 手術
71 宮島
72 広島
73 佐渡
74 比叡山
75 阿蘇
76 信貴山縁起絵巻
77 針葉樹
78 近代芸術
79 日本の民家
80 季節の魚
81 シャボテン
82 新劇
83 郵便切手
84 かいこの村
85 伊豆の漁村
86 奈良—東部—
87 奈良—西部—
88 ヒマラヤ
89 上高地
90＊電力
91 松江
92 動物の表情
93 金沢
94＊自動車の話
95 薬師寺・唐招提寺
96 日本の人形
97＊システィナ礼拝堂
98 美人画
99 日本の貝殻
100 本の話
101 戦争と日本人
102 佐世保
103 ミケランジェロ
104 空からみた大阪
105＊宗達
106 飛騨・高山
107 ゴッホ
108 京都案内—洛中—
109 京都案内—洛外—
110 写楽
111 熊
112 東京湾
113 汽車の窓から—東海道—
114 地図の知識
115 姫路
116 硫黄の話
117 伊勢
118 はきもの
119 隠岐
120 源氏物語絵巻
121 農村の婦人
122 出雲
123 アルミニウム
124 水害と日本人
125 日本のやきもの
126＊貝の生態
127 イスラエル
128 伴大納言絵詞
129 瀬戸内海
130 飛鳥
131 聖母マリア
132＊日本の映画
133 能登
134 山形県
135 福沢諭吉
136 利根川
137 鹿児島県
138 伊豆半島
139 日本の森林
140 高知県
141 チェーホフ
142 仏教美術
143 一年生
144 長野県
145 塩原
146 日本の庭園
147 木曽
148 忘れられた島
149 近東の旅
150 和歌山県
151 函館
152 豆
153 大分県
154 死都ポンペイ
155 富士をめぐる—空から—
156 神奈川県
157 柔道
158 戦争と平和
159 ソ連・中国の旅—桑原武夫—
160 伊豆の大島
161 ジョットー
162 熊野路
163 鳥獣戯画
164 愛媛県
165 やきものの町
166 冬の登山
167 埼玉県
168 男鹿半島
169 フランス古寺巡礼
170 滋賀県
171 白浜
172 東京国立博物館
173 千葉県
174 箱根
175 細胞の知識
176 四国遍路
177 村の一年—秋田—
178 セザンヌ
179 石川県
180 琵琶湖
181 仏陀の生涯
182 香川県
183 日本
—1955年10月8日—
184 練習船日本丸
185 悲惨な歴史—ドイツ—
186 ボッティチェリ
187 東海道五十三次
188 離された園
189 松島
190 家庭の電気
191 アメリカの地方都市
192 五島列島
193 塩の話
194 パリの素顔
195 横浜
196 日系アメリカ人
197 インカ
198 奈良をめぐる—空から—
199 子供は見る
200 雪舟
201 東京都
202 アフガニスタンの旅
203 渡り鳥
204 群馬県
205 ブラジル
206 ルーヴル美術館
207 北海道(南部)
208 小豆島
209 日本
—1956年8月15日—
210 富山県
211 毛織物の話
212 北海道(東・北部)
213 自然と心
214 空からみた京都
215 世界の人形
216 愛知県
217 諏訪湖
218 鉄と生活
219 山口県
220 麦積山
221 北京
222 江南
223 四川
224 広州—大同
225 室蘭
226 山水画
227 三重県
228 白山
229 鵜飼の話
230 島根県
231 小さい新聞社
232 北海道(中央部)
233 近代建築
234 岡山県
235 ねずみの生活
236 札幌
237 日本
—1957年4月7日—
238 広島県
239 北陸路
240 倉敷
241 ギリシアの神々
242 長崎県
243 水郷—潮来—
244 福井県
245 秋吉台
246 子供の絵
247 徳島県
248 十勝平野
249 岐阜県
250 青森県
251 中国の彫刻
252 熊本県
253 秋田県
254 苫小牧
255 山梨県
256 新潟県
257 村と森林
258 茨城県
259 福島県
260 旭川・大雪山
261 大阪府
262 奈良県
263 北アルプスの山々
264 地形の話
265 静岡県
266 軽井沢
267 佐賀県

41 冊

新刊

268

269

270

＊印は品切でございます

冬の半年は湖畔に住む人だけの生活

秋の中湖. 烏帽子岩付近

¥ 100